

今日の問題の経歴

6

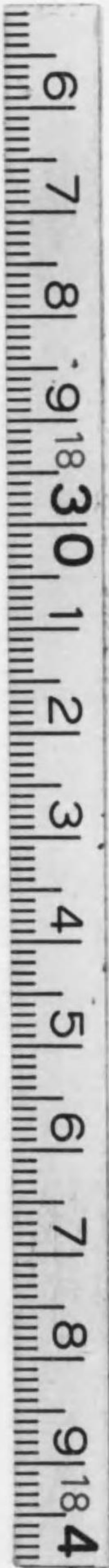
問題の政治小説!

失はれたた政權

フアシンヨか・憲政か

特249

13



始





今日の問題の経歴

650

# 失はれたた政権

問題の政治小説！

持249

13

浦貫一著

10<sup>セ</sup>



特 249  
13

小政治 失はれた政權

山浦貫一



官邸の正門も首相の住居になつてゐる日本間の方の門も嚴重に閉められてゐる。アゴ紐をつけた、新撰組とよばれる人々が、硬直して櫓の棒を斜にかまへてゐる。

毛利は、その嚴重な警戒裡に更けて行く夜の日本間の方の側門を開けさせ、目だたぬやうに地續きの書記官長舎に入った。

昭和七年五月十五日の夜、十二時を過ぎた時刻である。記憶をよび起こす迄もなく、政黨政治の燈火が突如として起つた旋風に吹き消されたその夜であつた。



彼は、いそいで二階へ上ると、自分の寢室にとびこんで、卓上の電話機を握り、陸軍大臣の官舎を呼び出した。

「こちらは毛利力。江崎中将がそこに居る筈だ、電話口へ」

「ハッ居られます。少しお待ち下さい」

「江崎君？ 毛利だ。君の傳言は聞いたが、何しろ抜けられない、電話で話さう。こつちには人がゐない。そつちには？」

「ゐない。至急話したいことがあつた、が何しろ官邸では行けません。電話もかけられん」

「話は何だ」

「政黨の方も大分昂奮しとる様ぢや。それは尤もぢやが、こちらの若い者も大分昂奮してをる」

「聞いた。君が、荒井君の旅行の留守で、そこに頑張つて大分骨を折つてゐると聞いた」

「まあ、今夜來た連中にはよく話しを聞いてやり、間違ひを起さん様にいうてかへした。もう皆歸りをつたが、お互に戒心せんと危ないぞ」

「事態が擴大しさうか」

「放つてをけば擴大しかねん。そこで君に相談がある」

「ム、聽かう」

「貴様、政友會を押へろ、俺がこつちを受け受もつ。どうぢや」

「よろしい。引受けた。何としても押える」

「陛下の赤子が内に争ふ秋ではない」

「貴様も惡まれ者になれ」

「俺一人が惡まれて、國の災厄がのがれるなら本望ぢや」

「後をどうする案があつたら聽く」

「俺は軍人ぢや。その方は君の本職ぢや。が國家百年の計を樹てなければ、一時押へちやいかん」

「俺も其の積りだ」

電話の内容はたつたこれだけであつた。

毛利は再び官舎を出て、隣りの首相官邸へ入つた。そして、いまは頭首を失なひ、各々自分の行く先がわからないので不安に捉はれた關係達が、さて何を決める元氣もなく雜然と打ちつどふ開議室のドアを排した。

中心人物ともいふべき荒井陸相も、漸く旅行先からかへつて來た。關係中の最長老高橋清藏相は、かつて夜の外出をしたことがないけれども、この場合はその方針をなげうつた。兎變に急遽駆けつけて一旦邸へ歸つたが、再び相談に呼び出されてやつて來た。



毛利の頭腦は、後始末のプラン、次の政權に對する計畫、總裁を失つた母黨政友會の黨首決定などでキリ／＼まひしてゐた。

彼は文相の鳥山を廊下に呼び出した。

「臨時總理は高橋さんに頼むとして、總裁を至急決めなければならん。床波がせり出して來ない中に機先を制してしまはんと面倒になる」

「さうだ。徒らに悲嘆に暮れてゐる場合ぢやない。それにしても早速手をうたねばならないが」

「その手は僕が、今から第一石を打つ。君は知らん顔をしとれ。悪たれ者は一人で澤山だ……」

毛利は次に、秘書に命じて清水代議士を至急さがして來いといつた。清水は臨時に代議士室に充てられた大廣間で、皆といつしよに昂奮の渦中にゐた。閣議室前の廊下へ連れて來られた。

「清水、君にひとつ頼むが、決して昂奮するな。君達が憤りを押へなければ全代議士が湧き立つてしまふ。この際、死んだつもりで靜かに靜かに誘導してくれ」

「それや無理だ。この昂奮憤懣の情勢を誘導すれば、始めて腰の抜けた代議士が、ふるひ立つ好機會ぢやないか」

「そこなんだ。それは僕も知つてゐる。が起つのは自殺行爲だ。マア好い。この俺が故意に腰をぬかしてゐるのだ。君等もその積りになつて、堪へ難い所を暫く堪へて貰ひたいのだ」

「ウム……」

「それから、總理は、實は絶命した。早急に後任總裁だ。鈴木さんだ。この方は猛烈に起つてくれ。その方法は……」

わづかに、耳うちで済す。懇談してゐる時間など有りやう筈がない。けれど清水は毛利に、底知れぬ深い考へがある、と觀て取つた。指令は、批評をぬいて、同士の耳から耳へ電流のやうに傳はつた。

總理大臣官邸の夜は、軍人の往來、警官の行動、役人代議士の左往に、物凄く空氣の中に更けて行つた。

日本間の方は、既に生命を絶つた老首相を繞つて家族親族が悲しみの裡に靜かに遺骸の處置に順序をつけて行つた。

本館の方では、首相が既に死んだといふ事實に就て知る者は閣僚書記官長、その他數名にすぎなかつた。發表の時期に就ては、いろ／＼の關係上、極めて慎重を期さねばならなかつた。

戒嚴令を布くべしといふ議論が或る一角から出た。新聞の掲載を禁止すべしといふ主張があつた。もちろん、内務省側では絶對反對であつた。

兩論を調和して行くのは書記官長毛利の仕事であつた。毛利は、あつちへ行つて大磯陸軍次官と立



話をしたり、こつちの隅で河原内務次官と耳うちをしたり、或ひは閣議室から荒井陸相や鈴木内相を廊下に呼び出さなければならなかつた。

書記官長室は警視廳の出張所になつてゐたし、次室は内務省の警保局が占領してしまつた。應接室その他どの室も、密談に用ひ得る場所はみな公開に等しい状態にあつた。

「まるで廊下蔭だね」

鳥山が慰めを冗談にまぎらして言ふ程いそがしく活動する毛利の頭の中では、早くも次の政權に對する思慮がめぐらされてゐる。

江崎は「一時押へちやいかん」といつた。江崎の考へは、あれは若い者の考へである。火事が猛烈な勢で燃え擴がる暴風の中では、周圍の家を破壊して、一定の區域から火事を擴大させぬ工夫をするその破壊を惜しがつてゐると、それこそ全町燃え盡してしまふ。

毛利は、ある計畫を、既にたてゝゐた。

## (二)

茶室めいた六疊の眞中には爐が切つてあり、茶釜がチンチン音をたてゝゐる。

床の間より風呂あがりの丹前姿で胡坐をかいてゐるのが内閣の毛利力である。その左膝栗頭に背

廣の膝をやはり胡坐に組んでゐるのが陸軍の杉貞三。もう一人は羽織袴をつけ、白足袋の爪先を、おなじやうな胡坐の間からのぞかせてゐる。外務省の黒井正三である。場所は赤坂の待合田川の二階。

毛利の密談、策戦、たいがいこの室が中心である。特に茶室作りを選んだのは、茶釜の音に、浮世ばなれの響があるからだといふ、妙な趣味によるものである。で、晝間會ふ人間と、夜田川で會ふ人間とは、毛利の數多い面會人の中で全く色別されてゐた。

それをすつかりのみこんで、痒い所へ手の届くやうに、電話の取次から呼出し、來客の種類分け等を、受もつのが、おつるといふ年増の女中で、彼女は、毛利の書記官長だ、と仲間から冗談をいはれて得意になつてゐた。無口で、寧ろ色氣がなすすぎる程枯れてゐる、それで秘密が保てるので、毛利はひどく、おつるを信用してゐた。

そのおつるも遠ざけて、例の浮世ばなれのした音を聴きながら三人は胡坐の膝をかゝへこんでゐるのである。毛利が、いつも一人で飯を食ふ小さい餉臺の上には、ウキスキーの瓶と、ソーダとコップがある丈で、室はまことに蕪然としてゐる。茶室に坐る心構への連中とは想はれない。

「東安寺はけふ駿河臺へ入つたきり動かないんだネ。それはいゝとして、けふ羽野の奴、汽車の中で爺さんを脅かしたのは少し薬を効かしすぎやせんか。平野内閣が出來ると、羽野の様な奴がぞろぞろ出て來て今にも天下がひつくり返る位に考へさせたのぢや永遠の計が水泡に歸する」



毛利の心配をうけて杉は言った。

「羽野さんは、極力政黨内閣阻止をやつたんだ。いろ／＼と過去の罪惡史を數へたてた上、最近の個人々々の調査表までひろげて、もし政黨が再び政權を握るやうなことがあれば、五・一五事件の再來を防ぐこと不可能だ、と結論つけた。東安寺は、黙々として聽いてゐたが、意見は一つも述べなかつた。だから、反應はなか／＼判らん」

「僕は妙な噂を聞いたよ」

黒井が口をはさんだ。

「齋藤の地下運動が相當猛烈に行はれてゐるといふ噂だ。伊澤竹雄が本尊だといふ……」

「それは僕の所へも入つてゐる。伊澤にすれば、僕等の方で三百名も代議士を當選させたのが癪で仕様がな。そこで、政友會は、犬養内閣成立早々には櫻田門不敬事件がある、今度は總理大臣自身が殺される様な事件が起きる、警衛の責任も時局擔當の能力もないから、當然野に下つて謹慎すべきであるといふ宣傳を始めたのが序幕だ。といつて、最少數黨の民政黨に政權をわたせ、とは言へないものだから、官僚の古手、小玉だの角野だのと朝鮮組を動員して、齊藤擁立、民政黨參畫、政友會除外解散と、手をうつてゐる」

毛利の情報網にはとうにそれが入つてゐる。黒井の噂よりもつと詳しく具體的である。たゞ彼はそ

れの實現性について全然問題にしてゐないのである。彼は軍部の狀勢に照して、平野以外に人はないと信じ切つてゐた。

「齊藤なんて妖怪の出る幕ぢやないヨ。民政黨を土臺にして、又、白原外交のむし返しでもやつて見ろ、日本は愈々亡國だ」

杉は吐き出す様に言った。

「こつちは、誰でも構はん。が白原外交だけは困る。支那を増長させたのは誰なんだ。まるで支那人の手先のやうな外務大臣ぢやなかつたか」

白原閣で固まつた外務省の中で、軍部のロボットだと異端視されてゐる黒井である。

「毛利君の前だが、犬養内閣だつて随分だらしなかつたぢやないか。たつた半年の壽命だと言へばそれ迄だが、一體何をしたのだ、井上財政の綻びを縫つて金の輸出再禁止をしたぢやないか。支那對策だつて、いつでもわれ／＼に引づられてゐる。引づられて隨つて來る。隨つて來ないよりましなんだ。三百三名をとつたといふから少しは積極的に出るかと思へば、祝酒に酔ひしれて、外に對する非常時を忘れちまつとる。政黨内閣の駄目な譯は、三百三名取つた君等が如實に手本を示したのだ。若い者が警世の爆音をたてるのは故ある哉。この上、政黨内閣でも出來て見ろ、爆音が大きくなる許りだ。政黨撲滅運動をキツカケにどんな騒ぎが起るかもしれない。僕はそれを恐れるのだ」



杉は、ウキスキー・ソーダをぐいとあふつて、眉を上げた。卓を叩かん許りの光景である。

「杉 昂奮しちやいかん。こゝは貴様待合だぞ。おつるが、杉さんは可恐い方だといつてをつた。貴様も少し藝妓買でもして見ると角が取れるんだが、どうだ、取りもつてやらうか、若い綺麗なものを……」

「藝妓買ひはせんが、おつるに嫌はれちや出入禁止を食ふ恐れがある。ハ、ハ、ハ、黒井君、どうだ君は、女ぢやないから僕の意見に賛成ぢやろ」

「勿論だ。毛利なんか政黨に未練を残してゐるのは死にかけた情婦を抱いて寝るやうなものぢやないか」

「俺の親父は自由黨で血を流した。俺は親父から忠義の教育を叩きこまれた。死にかけた情婦ぢやない、とうに死んだ親父の血が俺に流れてゐる。俺は政黨をも一度仕立て直す義務がある。その爲めに俺は貴様達と手をにぎるのだ」

毛利の死んだ親父といふのは作太郎といつて日本の政黨創造時代に刃の下をくゞつた人であつた。毛利は續けた。

「俺は、君達が何ういはうと、私情からいへば鈴木單獨内閣が作りたいたんだ。その片棒を擔いで居れば政黨の反逆者扱ひも受けなくて済む、ナア杉さうだらう」

「出来ないから仕様がな。もし出来たら其の日に潰れる。若い者は、俺達をまでもうダラ幹だと言つてをる。維新の志士は無名の青年だつた。今日の志士は無名の軍人だ。それを認識せずして國政を運用しようといふのはコンパスなしで荒海を横切らうとするものだ。平野内閣を作つて、強力政權を樹て、對外問題をまづ片つばしから片づけて行くより外に内をまとめる途はない。さうと知つてゐる筈の君が、今更ら、私情で愚痴をいふのは可笑しいぢやないか」

「やらう。一身の利害を考へて居る時ぢやない。もう此話はよせ！」

「お呼びでございますか」

おつるが襟をあけた。

「腹が空つたな。黒井も杉も未だ飯は食つちやゐない。何か食ふ物をもつて来てくれ」

もう夜の九時である。毛利は飯時を忘れる程頭の方が回轉する數日であつた。

「僕は天ぶらそばを二つ取つて貰はう」

杉である。

「もう少しまい物を食はんと身體が持たんぞ、牛肉か鰻でも食つて精力をつけて、お前も睡眠不足を補充するサ」

これは毛利である。



『天ぶらそばとはさすが田舎漢だ。質實剛健だ』

黒井がひやかした。

『これでもぜい澤だ。あの連中に天ぶらを食はせて呉れつて錢を渡して来たんだよ。だから俺もこれでいゝのだ。君達は勝手に食ふがいゝ』

事件で自首した若い人々を思ふこの純真な將校は、飽迄天ぶらそば二個を主張して譲らない。

おつるは、黙つてこの問答を聴いてゐたが、杉といふ將校を、頼母しいものと思つた。だから、すべて杉の思惑を亂すまいとして、料理も酒も運んで来なかつた。勿論、酌人を招ぶことは絶対に避けねばならぬことゝ、おつるは心得た。

『どうも、何だな杉、政治家も外務省も、軍部に追隨するより外に道がない様だな』

毛利は愉快さうに笑つた。

『天ぶら迄引づるんだから叶はないよ。兵隊つて奴はうまい物を知らんから向ふ見すなんだ』と黒井が相槌をうつて笑つた。毛利は之に和していふ。

『さあ杉、来たよ、お前の最もぜいたくな食物が』

『暖かい中に何卒召し上つて下さいまし』

おつるは先づ杉にすゝめた。

『おつるさん。さつき毛利君が言つてゐたが、僕は君に評判が悪い相だね、悲觀したぜ』

『まあ 何故で御座いませう。先生、何かおつしやつたんですか』

『ウム。杉にな、女を世話してやらうかと言つたら女でもおつるの様なのはお母さんのやうで好いが若い妓ぢや不服だとさ』

『まあ……杉さん、ほんとうで御座いますか、お人の悪い。もう天ぶらそばを御馳走してさし上げませんよ』

『それや困るナ。天ぶらだけは食はして貰はんと、この勢で政黨を潰すんだからな。ハ、ハ、ハ、』

杉は冗談から、眞面目に飛躍した。

『おつるさんの様な女が満洲へ行つてくれるといゝんだがな。吾々仲間のおふくろ見た様になつて世話してくれるといゝんだがな。全くあつちにある女は、人を食ふ事ばかり考へやがつて少しも同胞の爲に計らうつて氣がないんだ』

すると毛利は眞顔になつて言ふ。

『おい杉、何か陸軍の宿屋かクラブ見たいなものが出来るんだらう、新京へ。そいつをおつるに經營さうか、資金は俺が出す』

『それや好い。名案だ。軍人會館が出来るんだが、食堂とか料理部とかは誰かに受負はせんやなら



ん。この人ならうつつつけた。どうだ、おつるさんやるか」

「やるもやらんもない。やるな。お前と俺でお膳立てしてやればいゝ。これも重要國策の一端だ……  
ナアニおつるは金を貯めて親父やおふくろや子供を樂にしてやれやいゝ」

「子供があるのかい。驚いたナ」

「あるにも、三人もあつて、亭主に死に別れた」

おつるはさすがに女の身の上をさらされて羞かしいか、顔を赤くしてうつむいてゐる。然し、毛利が冗談にも、人の將來を約束する様な男でないことをわきまへてゐた。

「いやですわ、先生。今夜はウキスキーを召し上り過ぎはしませんか」

黒井が口を入れた。

「おつるさん、僕が證人だ。大丈夫だ。平野内閣が出来上つたら、賞與に、満洲のお母さんになるサ。杉も何れ參謀で行くだらう」

「ありがたうございます。お證人さまお忘れなく……」

おつるは冗談とも本音とも分らぬ微笑を浮べて黒井のそばのフタを取るのであつた。杉の方は、もう二ツ目に箸をつけてゐる。

毛利は腕を組んで唇を噛みしめてゐる。そばに箸をつけようともしない。おつるは、彼の氣象をの

みこんでゐるので、召し上れ、ともいはず、何れ密談が続くものと察して室を出て行つた。

(三)

おつるはやがて一片の紙きれを持つて來て毛利に示した。

「土屋様、清水様、川崎様御來訪」

と書いてある。客の名前、電話の取次、他と對談中は一切口頭で言はぬことになつてゐる。これは注意深い政治家だけが用ひるやり方であつた。

「あつちの室で待つてゐて貰へ」

斯ういふ場合に待合は、その効用を發揮する。室の構造が、隣宅と隔絶してゐる。客と客とが容易に顔を合さない。誰の私邸でも餘程大きく、室を幾つも取つてない以上、來客の鉢合せで困ることが屢々ある。毛利の私宅は小さかつた。官舎は開けつばなしであつた。新聞記者が、役人が自由に出入した。

「それちや又明日の晩、會はう。今から向ふの客と會つて、それから又出かけて來る」

杉と黒井が歸ると、入り代りにいま來た三人が毛利の居城へ案内されて來た。坐るか坐らぬかに土屋は口を切つた。



「大將、成功しましたよ。總裁が、われ／＼代表者の要求を容れて、貴下を副總理、内務大臣として組閣する約束をしたんです」

毛利はギクツとした。

「總裁は、君の力で總裁になつたことをよく承知して居る。副總理は當然な話だ……」  
最年長で、毛利の兄貴分にも當る清水が言ふ。川崎はこれに和す。

「鳥山氏が、後でお茶を入れても總裁の決心を覆へすことは出来んと思ひます」

毛利は、腕を組んだまゝ一言も發しないが、心の中では、困つたことになつたと思ふ。

この訪客三人は、毛利幕下の三勇士といはれる程の間柄である。毛利を主盟とする政友會代議士數十名は、殆ど秘密結社ともいふ可き團結力と爆進力をもつてゐる。犬養總裁が兇弾に仆されて、扱て後繼總裁を急速に決めなければならぬ時に、候補者は鈴木友三郎と床波竹二郎が對立した。

この兩人に差し支へあらば、前に一度總裁をやつたことのある大藏大臣の高橋清を暫定總裁にして時の推移を見るといふ床波派の、表面的穩着論も亦有力に傳へられた。

何しろ、その兇變直後の政界常識では、當然政友會内閣の再出現といふ輿論だつたので、誰にも後繼總裁即後繼内閣總理大臣として考へられた。だから、總裁を奪還するといふことは、黨内各勢力派閥に取つて、死ぬか生きるかの問題だつたのである。

鈴木は、毛利と文相鳥山の兩翼に支持されてゐた。この兩翼の新興勢力に對して反抗せんとする舊派の人々を主とし、毎々に毛利、鳥山に壓せられてゐる弱少ブロックは勢ひ床波を擁立して彼等の勢力に導抗の機會を掴まんとした。

もし、何等の工作も施さぬ間に、黨内の一般投票を行なつたならば床波派は散票を掻き集めて當選したかも知れない。然し乍ら、毛利は、兇變直後に、彼の幕僚長清水に急命を下した。「鈴木をデツチ上げるんだ」

その晩から、清水、上屋、川崎を中心とする毛利の手兵數十名は、山王ホテルに陣を構へて、まるで戦争のやうな徹夜の活動をはじめたのである。一方鳥山の方は、自分の邸を本據にして情報を集め中立と目される者の勸説手段を講じた。けれども山王ホテル組は、より以上に動いた。殆ど非常手段ともいふべき強力金力工作、潜入、あらゆる手を盡して、連判状を作つた。鈴木擁立同盟のそれである。そして三百三名の過半数を忽ちにして握つてしまつた。

毛利一派がかういふ強硬方針を進めるので、切角獲得した未曾有の大勢力が眞二つに分裂しはせぬか、と恐れられた。が割れれば割れたで、却つて脂肪過多症の脱脂法的作用をなして健康になる。構はんから押せ／＼といふのであつた。

鈴木擁立派は、既に大分裂しても惜しくない丈は連判を集めた。集めてをいて、扱て次の手はとい



ふと、總裁は公選すべしといふ論を樹てた。公選すれば鈴木が勝つて定つてゐる。しかも黨には死んだ規則ながら、總裁は公選とし、その任期を七年にするといふ明文がある。表面きつて陰謀だ、とケチをつける餘地は残念だけれどもなかつた。大勢がかう定ると、之れに反抗する者は逆に黨の攪亂といふことになる。それが嫌なら脱黨しなければならぬ。

反鈴木ともいふべきいはゆる巨頭岡崎邦太郎、餅月慶助、久原房太郎、といつた人々は、逆に床波を説服して鈴木擁立を全黨一致の形式にもつて行くといふ風向に變つたのである。床波は岡崎、餅月兩説得使の來訪を受けて即座に鈴木推戴を承知した。

だいたい、かういふ筋書で鈴木總裁は出來上つたのである。

鈴木政友會内閣は目の前にぶら下つてゐるかに見えた。

清水、土屋、川崎達は勿論信じ切つてゐる。毛利は當然副総利である可きだ。さう思つて運んだ仕事であつた。なる程毛利自身から内命を受けてはゐない。大體毛利といふ男は、口が腐つても自分の獵官運動などする男ではないことを承知してゐればこそ、幕僚が獨斷でやつた仕事である。不服をいはれる筋は少しも咎である。

然るに、毛利は腕を組んだ儘黙りこくつてゐるのである。

『僕が悪かつた』

毛利は吐き出すやうに言つた。

『君達は、僕をそんなに迄思つて呉れてゐる。なのに、僕の考へてゐることは、君達と違つてゐる。僕は鈴木さんの内閣が出來ても入閣しない！』

これは、三勇士にとつて、爆彈である。何故爆彈が仕掛けてあつたか、判斷の仕やうがない。年長の清水は然し自らの思慮不足を感じたらしい。

『僕等が悪かつた。獵官運動なんかして君の氣持を壊したのは悪かつた。總裁をデツチ上げた返禮を寄來せと迫る、ナル程君の氣象には合はん……』

『大將、鳥山氏に義理をたてゝゐるんですか、當然副總理、内務大臣を以て自他に許す鳥山氏を押しつけたと思つてゐるでせう』

土屋は叩いた。

『鳥山氏は、軍部にボイコットされてゐます。あの人のあけすけな自由主義が容れられない。よしわれ／＼が一致して内務に推薦して、もし就任したとして、その結果はどうなりますか。これは僕等より大將の方がよく知つてゐる筈だ。鳥山氏に關する中傷の怪文書は既に横行してゐる。こゝで無理すればあの人の將來が斷たれる。むしろ閑な椅子にゐて將來を築く方が鳥山氏の爲めでもあり、黨の爲』



めでもある……」

川崎の説明のあと、毛利は重い口を開いた。

「獵官も時によつては志を伸ぶる手段だ。鳥山を排斥して僕がその地位を奪ふといふ事も、それが時艱を救ふ唯一の手段なら私交を犠牲にせねばならぬだらう。……然し僕の志はもつと飛躍してゐるんだよ。手つ取り早く目の前の現象に就ていへば、平野内閣を造るんだ。政友會と軍部と組む、民政黨を叩き潰して一國一黨にしてしまふんだ。さうして強い政治をやる。滿洲事變の後始末。支那を手も足も出なくしてしまふ。勿論國際聯盟なんぞ脱退してしまふ。アジアに還るのだ……日本の生きる道はこれしか無いんだ。然し非常に危ない仕事だ。周密敏速な作戦が要る。愚圖々々小田原評定をしたり、元老重臣の思惑から英米の鼻いきを氣にしてゐたのぢや何にも出来ない。後手になる……」

三人は、餘りにも事の意外に度膽をぬかれて黙りこくつてしまつた。それでは、五・二五事件を機會にしてフアツシヨ政治を計畫する或る一部の陰謀と同斷ではないか。政黨政治への反逆者ではないか……われ等の大將が……」

「かういふと君達は僕が兵隊に降参したと憤慨するかも知れん。だがこの荒れ馬は口をとつて引つぱらうとするよりも、ヒラリと背中に乗つて走らせる方が上策だ」

「君なる乗れる……」

清水は重い口と目をいつしよに開いた。

「ぢや、黨の方はどうします」

川崎は不安さうな目をした。

「鈴木内閣だつて、差支へないぢやありませんか。軍と手を握れば」

土屋は、不満さうに言つた。

「僕も、情に於ては鈴木さんを總理大臣にしたい。が實際問題として到底望みはないのだ。それは僕の、情報網が確實に示してゐる。鈴木さんが、いゝ氣持になつて、單獨内閣を主張したり、軍部の口ポットにはならぬと放送したり、すればする程駄目になつて来る。……あれ位、僕が注意してをいたのに口が軽すぎてお話にならん……」

毛利は、また改めて、腕を組んだ。嚴然たるあの顔は蒼い。彼は、もち前の冷靜さを昂奮の餘り失なひでもした如くに續けるのである。

「いゝか、おい。支那だよ。問題は先づ支那だよ。あの蔣介石に、すつかりなめられてゐる日本を見るが、いゝ。四十そこくの青二才に、支那通を以て鳴つた七十七の木堂でさへなめられた。これは支那人の本性を底の底まで知らんからだ。僕は君等も知つての通り二十の歳から支那屋だ。見ろ、あの蔣を始めとし、幹部といふ奴は、みな日本の留學生ぢやないか。日本の支那人教育は、即排日教育だ



つた。こんな馬鹿な算盤外れの話つて何處の世界にある。こいつを御破産にする、建て直しをして北支那を日本の別荘地にする。支那四億の人間に日本の品物を買はせるのが満洲事變後の新らしい僕の對支政策なんだ。自原外交は國賊外交だが、犬養外交、吉井外交だつて一知半解の失敗を繰り返してゐる。いや兵隊も抜けてゐる。強がり一方で、賣つて儲ける事を知らん。毆つてをいて、撫でる、このコツは、僕でなくちやわかるまい……僕は、これ一つ仕送れば大半の政治目標は達成するんだ。その必要から國際聯盟を脱退する……内政は外政を整理する爲に、有ゆる政治勢力を單一化することしかない。之れに内から邪魔するのは、誰でも國賊だ。元老も重臣もない。もし政友會がさうやら政友會もない。民政黨なんぞは消滅して可い』

聽いてゐる三人は、おぼろ氣ながら、彼等の盟主の志が解つたやうな氣がし出した。たゞ政友會内閣を主張しないのが頗る不満な丈である。總裁の側近では、政務官から秘書官まで内定してゐるといふのに、こつちは肝腎の大臣さへ逃げてゐるのである。支那問題もいゝが……いや毛利の前でそんな事を考へるさへ罪惡かも知れんぞ。

『わかつた。僕等が悪かつた』

さつ間の間に取り寄せたか、酒好きの清水はコップで三四杯あふつた後であつた。

『で、と毛利君。俺等は君の方寸通り火でも水でも飛びこむんだから、方角だけは示しといて貰はん』

と困るぜ』

『それだ。それだ。大將それだ』

川崎と土屋は同音に叫んだ。

毛利と彼等との間には、一種封建的な主従關係に似たものと、俠客の親分、子分の間柄のやうな單純で強い感情が結び目になつてゐた。

『さういつて貰へば嬉しい。いや俺が悪かつた。もう一つ言つてをくが、俺はまかり間違ふと生命が危ない。が慌てちや不可いよ』

『何故？』

『乗り手は御する積りでも、力が足りなければ振り落されて踏み潰される』

『わかつた。もうこれ以上訊くまい。野暮だ』

清水は叫ぶやうに言つた。川崎と土屋は、感情をこめた目と目を見合せるのであつた。

(四)

『林君、昨日頼んでをいた計算、出来てゐるかネ？』

『はあ、みんなもつて來させてをきました』



『總計いくらかね』

『一萬二千五百二十圓五十錢です』

秘書の林は、ピンで綴つたひとまとめの紙片を毛利の前に差し出した。紙の数は十二、三枚もあるか。赤坂、新橋、柳橋、日本橋の、いはゆるお茶屋から差し出した、未だ受取の判だけ押してない受取書である。毛利はバラ／＼と一通りめぐつて見たが、目を通したのはお茶屋の名前だけである。内容は見なくとも、貴族院の誰々。陸軍の誰彼。海軍のあれ、乃至大阪からわざ／＼招んだ實業家の某。乃至は新聞記者と一夕の會談をした、などといふ類。いづれも機密事項に屬するものである。

『これ丈か、林君』

『はあ、この他に官邸の宴會費があります。まだ東西軒から届けて参りませんが、約三千圓と思ひます』

『それは、何だつたね』

『政友會の新當選代議士を、總理がお招びになつた祝賀會。それから貴族院の方々を、矢張り總理がお招きになつたあれ、それから……』

『ヨシ／＼、あの、毎日食ふ晝飯ね、あの方のも來てゐるかい。閣議の晝飯と、それから、下の連中の辨當なんかあつたね……』

『はあ、あの方は千圓足らずと思ひます』

『ぢや、未だ全部集まつてゐないんだね。至急集めて合計を知らせてくれたまへ。明日は拂つてしまふ……』

『田川のは何う致します？』

『あれは君が心配せんでもいゝ』

『……しますと約二萬圓です』

『横水君を一寸よんでくれたまへ』

横水といふのは、内閣書記官である。

横水は、書記官長室のドアを排して毛利の大机の前に立つた。

『君、機密費は残つてるかい』

机のひき出しの手紙や書類を破りながら横水の顔を見るでもなしに毛利は投げつけるやうに言ふ。

『……残つて？ はあ、五萬圓あります』

『五萬圓？』

『上半期の分はすつかりお使ひになりました。下半期の分が五萬圓……』

『今月は五月だね。會計年度は四月からだね。すると四、五の二ヶ月で五萬圓使つたのか？』



『さうです。兎も角、林君の方へ差し上げてあります』

『おい林君、受取つてあるね』

『あります。然し、手許には二三百圓しか残つてをりません』

『すると？』

横水は、こゝで、後繼内閣の書記官長に受けつぐべき帳簿面を早くも胸算用してゐる。下手をすれば自分の落度になるからである。

『幹長、月割りにして約三萬四千圓かへして頂かねばなりません』

『何だ、借金が、泣つ面に蜂かい、馬鹿々々しい。よし、解つた。よろしい』

横水は、自分が悪いことでも仕でかしたやうに、恐縮し乍ら宅を出て行くと、毛利は例により腕を組んで、室の中を歩き出した。秘書の林は、金庫の側にをいてある自分の机にむかつて、計算をしてゐるやうである。

『すると、五萬……いや六萬圓なくちや官邸を引拂へないんだな。小者その他の手當も要る……』

ひとり、毛利はつぶやいた。

政權の中にある時であれば、金を作ることも比較的容易である。けれど、いまは内閣主班の凶死によつて、事實上犬養内閣は倒れて政權は宙に迷つてゐる。毛利は、官邸を引上げるための残務整理を

してゐる最中である。機密費年額十萬圓は、凡そ宴會費にも足りない。本年度、半期分は既に使ひ越しになつてゐる。政治資金として、書記官長の手で集めた金は、全部總理の手にわたしてゐる。死んだ總理から貰つて來る譯には行かない。さりとて、誰が來るかわからないが、後からの書記官長の事務の引繼をする時には、機密費は第一であること、自分にも經驗がある。

『鈴木さんに二萬圓、鳥山に一萬圓出さすとして、あと三萬圓は、出せといつても出す奴がない。俺が作らにやならんか』

これから政權を取れさうだといふ時などは、電話一本でそれ位のものは、向ふから持つて來るのである。いま後繼内閣を待つ間の殘燭政權に對して、鉅一文も獻金するものではないこと、實業界の情勢に通じてゐる毛利には、手に取る如くわかるのであつた。

『仕方がない。俺の手形で作る迄だ』

毛利は、室の西角まで歩いて、突當らうとする途端に、さう決心を定めた。

『おい林君、車を出してくれ。君はもう歸つていゝよ』

日はもう暮れた。初夏の夕暮は氣早い浴衣の人が街を歩いてゐる。毛利の車は、官邸の直ぐ下に在る田川方へ下りて行つた。

『おい〜おつるはゐないか』



上り口から毛利は急がしさに、用事を頭に浮べてゐる。例によつて、おつるがゐないと、事務が一ツも運ばないのである。

『おい、おつる電話で鳥山を呼び出してくれ、それから風呂と飯だ』

さういひ乍ら二階の、例の六疊の方へ一人で上つて行つた。折よく鳥山は宅にゐた。毛利の非家庭的な生活と異つて鳥山は、宴會さへなければ自宅で家族と共に飯を食ふ永年の習慣である。非常事件の政變最中であるから、政界財界の人々に取つては、戒嚴令こそ實施されてゐないけれども、それと同様な異状態の下に、宴會といふ宴會は全部中止されてゐる。たゞ、毛利のやうに、待合を事務所にする政治家だけがかういふ街を必要とするだけであつた。

音響の洩れぬやうに、羅紗を張りめぐらして密閉した電話室の中で、毛利は、鳥山文相と話してゐる。

『……で、總裁に二ツ、君に一ツ振り當てたんだ、後を濁さぬ様にしたいからなア。何？ 舞田にも出させろつて？ 出しやしないよ。これから大臣になるんぢやないんだ……呑氣なこと言つてるね、どうせ次はこつちの天下だから、明日や明後日といはなくても可い？ さうは行かんよ。見當が異ふよ、もう番町を素通りして大久保の方へ近づいたぜ、アテにしてゐるとピツクリして心臓麻痺を起すよ。……まあいゝや、そんな事はどうでも、明日一本もつて来て呉れ、鈴木さんへはこれから行つ

てさういふから……ナニ？ 今夜三人で會ふ？ よからう、だがネ、新聞記者が寝ちまつてからでなくちや危険だ。——ウンさうだ、鈴木さんにね、君から電話をして十二時になつたら門を閉めさせるんだ。新聞記者の引上げた後で落合ふことにする……いつたい其の電話の側には誰か人がゐるんぢやないか？ 何？ 奥さんと田村に飯野、仕方がないな、君はのんき過ぎるよ。君の方から、デマだの秘密だのが頻りに飛ぶんだ。それがそつくり其の儘僕の方へ入るんだ。困るね。君と僕の間をさしてその間隙に乗じようといふ魔手が動いてゐるんだぞ、しつかりしないと、君なんぞは甘いから乗せられるんだ。僕と話したことは絶対に洩しちやいかん。いまが肝腎な時だ。わかつた？ ちや、十二時半……』

電話を切つた毛利は例の六疊へ歸ると一人言のやうにつぶやいた。

『家庭圓滿もよしわるしだ』

鈴木新總裁の兩翼といはれる鳥山文相と毛利書記官長は、然し性格は全然異つてゐた。故にこそ夫婦の様に存在した。鳥山の方は秘密はもたぬ、毛利は極端に秘密を、愛好しさへする。鳥山は積極的に働らきかけて情報を取ることをしないのに、毛利は、有ゆる方面から積極的手段で情報を蒐める。鳥山は潮にのつて自然に押し出されるを待つ風があるに對し、毛利は潮が自分と逆にさす時にも強引に潮を乗切らうとする男であつた。



鈴木とこの兩人との關係をいへば、何も鈴木の子分とか幕下とかいふのではない。鈴木を立てることによつて彼等の地歩に便宜を得ると共に、党内の新勢力に對抗する足場を作るに在つた。だから、子分を持つといふ點からいへば、鈴木直系といふべき者十人位に對し、彼等に各々ついてゐるそれを合計すれば黨の半數を占むる勢であつた。鈴木は兩人の擔ぐ駕籠に乗つて進む客であつた。どちらかが、俺はもう擔ぐのは嫌だといひ出せば、駕籠は一步も前進しなくなるのみである。

毛利の幕下には、俠客風な氣分があつて、親分の爲めには水火を辭せぬ強硬分子で固まつてゐたし、鳥山の方は知識的な分子が集まつてゐた。だから、自然と兩派の氣風は異つてゐる。けれども鈴木新總裁を中心にして兩人が仲よく駕籠の前後を擔いでゐるから、大勢の者は、鈴木を焦點として集中してゐるのである。

これを、党内の反對勢力、または反對黨乃至政黨政治否認の陣地から展望すれば、極めて心憎い邪魔な一團である。この一角を崩すことは、己が力を伸ぶることになるのである。政變を機として攪亂の策謀は、有ゆる方面から伏兵となつて表はれ始めた。

毛利はフアッシュヨである。政黨政治の攪亂者である。鳥山を押しつけて自分の權力を伸べんとするといふ放送が飛び出せば、一方毛利に近い方面からさへも、鳥山を陥れる爲めの怪文書が飛び出すといふ有様であつた。中間のある者が毒ガス作業をやつてゐると注意する者は少なかつた。政變に對す

る兩人の觀方、考へ方に相當の距離あることがだん／＼判明するにつれて、兩派の幕下達は、魔手を反省する暇もなく、鳥山派は毛利を、毛利は鳥山派を各々公然と中傷しはじめさへしたのである。毛利が電話で、鳥山に注意したのは、この故であつた。兩人の力を加へれば三人前四人前にプレミアムがつく。割れ、ば額面以下にしか買はれない。それを毛利も鳥山も各々肚の中で心得てゐた。けれど、幕下はそれに對して反省をもたなかつた。危機はそこに在つた。

(五)

政變の幕は、上京した元老を中心にして、靜かに進んで行つた。一夜を、駿河臺の邸で黙考した東安寺公爵は、その翌朝、まづ臨時首相の高橋藏相の來邸を求めた。

臨時首相から責任ある『政府當局』の話を聽いて、次には内大臣の牧山、樞密院議長の倉橋など、いはゆる重臣が招かれた。民政黨の總裁である若月は、總裁の資格ではなく、前の總理大臣として意見を徴されたし、清原子爵、山川權兵衛伯などもその意味で意見を聽かれた。

不思議な現象が消息通の間に、早くも知られた。高橋は現に政友會の最高顧問の地位に在つたにも拘らず、政友會の鈴木總裁を推してゐないといふことであつた。また若月は、政黨人の立場から立憲開黨は暴力によつて破壊さるべきでないといふ新聞記者への談話から推論しても、當然政友會内閣の



延長を進行すべき筈であるのに、矢張りこれをしてゐないことであつた。いづれも舉國一致をいつたといふ消息なのである。

これ等の中で、一人變り者がゐた。それは山川であつた。

山川伯は、東安寺公の使者にむかつて訊いた。

『拙者の意見を聽けといふお上の御思召であるか、または東公独自の意見であるか』

使者の山内といふ貴族院議員は答へた。

『公爵が、御下問に奉答する爲めの豫備知識に、閣下の御意見を承はりたいので……』

權兵衛は、昔からこの老人に對して好感をもたぬ。

『お上のお思召ならば參内して申上げるが、個人の参考のために意見を申上げることではでき申さぬ、左様お返事下さい』

權兵衛は平野内閣を要望して居つたが、東安寺は、平野に對し、好感をもたないので、この實現性はない、と見透してゐるしかつた。その山川伯が、元老に楯をついた丈で、陸軍の上原元帥、海軍の東郷元帥、招かれるまゝに駿河臺へ行つて慎重に意見を聽取されたけれど、誰一人として政友會の鈴木内閣を言ふ者はなかつた。これ等の人々は、根が政黨と反對側の人々であつた。または、總裁その人に對して好感をもてぬ人もあつた。又は、政友會と民政黨の協力内閣にして民政黨の立場を好く

したいといふ下心の人であつた。

かうしてゐる間に、突如、大映しに描き出された人物は、朝鮮總督を前後十年もねばつて、今は全く隱居の境界に在る過去の人、齊藤誠子爵である。齊藤擔ぎ出しの策謀は、毛利力の情報網にはとう入つてゐた。毛利には初耳ではないが、鈴木や鳥山には爆弾に等しい恐異感を與へた。

鈴木單獨内閣を單的に主張したが、形勢不利と見て、民政黨との聯立は御免蒙むるが、軍部の意嚮をとり入れて、天下に人材を求め、之れを入れるゝに吝かでない、と折れて來た。鈴木にして見れば容易ならざる敵の出現である。人材も、非人材も、齊藤内閣とならばこつちの發言權は根こそぎ奪はれてしまふ、そこで、鈴木のうちた手は、この新らしい敵にそなへる爲めの示威として超然内閣絶對反對、入閣絶對拒否であつた。それを高調して、示威運動の爲めに、代議士會を開いて激越な演説をさせるといふ段取りであつた。(三百三名を除外して内閣が出来る筈はない。)

毛利は、しかし、今や明らかに總裁のやり口に反對であつた。彼は、齊藤の可能性を未だに信じない。陸軍の内部情勢に照して、妥協主義、沈靜本位の政權で彼等が納まる筈はない。だから、鈴木も齊藤も所謂アテ馬の役をするに止まつて、落つくさきは大久保の住人平野驥太郎に定つてゐる、と信じてゐる。

平野と毛利は、親しい間柄でも何でもなかつた。平野は、樞密院の副議長で、右翼精神主義團體で



ある國幹社の總裁、それで陸軍の中心に或る種の觀念的な信任があるといふに過ぎない迄のことで、大政治家とも、抱負經綸ある英傑とも思つてはゐない。たゞ平野をロケットにして軍と結び、過渡時代をのり切るべく一國一黨的強力政治をやる以外に、日本を窮地から脱却せしむる途はないといふ考へが根幹をなしてゐたのである。

勿論、平野内閣ならば自分が第一に入閣する。そして大政友會を右手に、巨大な軍部を左に携けて難局打開のメスをふるふ。椅子の如きは問題に非ず。これが毛利の志である。

(六)

麴町六番町、鈴木友三郎邸に初夏の夜は深々と更けて行つた。

新聞記者は、とうに引き上げてしまつてゐる。たゞ代議士が二名と、それから豫備であるが陸軍の主計總監である大野長太郎が階下の應接間に控へてふるまい酒の餘りをなめてゐる。鈴木、陸軍消息は、大部分この大野から受け取る。大野は或る部面の上層部と通じる所があり、彼一流の消息と聯絡をもたらずので、鈴木は、この際、最重要人物の一人として、相談相手としてゐるのである。

『大野さん、どうかネ大丈夫やろか。齊藤説が大分強くなつて來た様やが』  
鈴木秘書官井上は、今度は參與官に昇格する筈だ。氣が氣ではない。

『大丈夫とも、太鼓判を押すよ。わが陸軍の意志を無視して内閣が出来るものか。わが陸軍はぢや、田中さん以來政友會に好意をもつちよる。政友會は元來が積極政策で、吾輩どもとよく馬が合ふ。あの民政黨たらいふ支那人の政黨は、あれは駄目ぢや』

大野はもう好い加減、祝酒がまわつて居る。何しろ、五六時間絶え間なく鈴木内閣を飲んでゐるのである。

『けふは晝間、海軍の將校が二人來て、總理……いや大臣に會つたが、何をいふかと思ふと、政黨意識に捉はれずに、公平な政治をやつて頂きたいと注文をつけをつた』

これは、今度總理大臣秘書官になる筈の新代議士、鈴木丸抱えの橋野である。  
『大臣は何と答へた』

大野が首をのばした。

『わかつた、大いにやる。君等も國家の爲めに大いにやつてくれい、といつて握手をしたところが、連中、入つて來た時の恐ろしい顔が惠比壽顔に變つた。海軍の青年將校が鈴木内閣と見透しをつけて居る位だから、海軍出身の齊藤さんは噂だけに過ぎないぢやないか』

『それは縁起がよい。どうも大野さんの前だが、陸軍の青年將校は不謹慎やな。何ぼ士官候補生いふたかて陸軍は陸軍や、それ等がわが黨の總裁を殺しをつたのに、この機逸すべからずとばかり、平野



内閣ぢや。軍政府ぢやと……二階に居る毛利力まで引づり込まれちよる、何ちうこつちや。そこへ行くと海軍の方は、大臣が、軍人は政治に關與すべからずちうお布令を出して居る。尤も現役海軍軍人が主役をつとめつたといふこともあるが、兎も角謹慎の意を表さう、ちう精神はえい。あれでなくちやあかん。けふ來た將校も憲政が暴力によつて破壊されちやあかんちう建前を知つとる」

井上は、一流の關西辯でまくし立てた。

『ハ、ハ、都合の好い方にばかり取り居るナ。鈴木内閣を是認した點はいゝが、注文をつけに來よつた點は立派な政治關與ぢやないか……海軍も陸軍も、政治の現狀に不滿な體は同じぢや。鈴木内閣でひとつ、積極進取の政治をやるんぢやナ。君等もいそがしくなつて結構ぢや。及ばず乍ら吾輩も、陸軍上層部との聯絡は怠りなくとつて進ぜよう』

『時に、二階はいやしんねりむつゝりと靜かにねばつとる。閣僚の詮衡から、政務官、秘書官の取り定めとなれや、何しろ大政黨だから、時間もかゝらうといふものだ、どれ一寸様子を見て來よう』

橋野は、やがては、かういふ風にして首相官邸の閣議室へ入つて行くのだ、と思ふと胸がわく／＼するのであつた。

二階では、鈴木、鳥山、毛利の三人が、茶器の散らばつた紫檀の大机を中にをいて、まれに見る緊張を示してゐるのだ。

『……ぢや君は政友會を見離して軍閥官僚と握手するといふのかネ、毛利君』

さういふ鈴木の手は、膝の上で、震えてゐる。思ふに、十二時半から、一時半まで、一時間といふものこの論が續けられたらしい。

『鈴木さん』

と言つたが、毛利は改めて、

『總裁！』

と叫ぶやうに呼んだ。

『僕も毛利作太郎の息子です。官僚や軍閥の爲めに、親父がどんな苦しい思ひをしたか、よく知つてゐる積りです。失禮ですけれども貴方のやうに、役人の秀才として官界の順風に帆を上げ、必要に迫られて政黨に入られた心境とは根本的な違ひがあります』

『それだから言ふのだよ。毛利作太郎翁といへば日本政黨史上の重要人物、その御親父に仕込まれた君が、今日に及んで、軍の若い者達と手を握つて、官僚の本尊を立てやらうといふのだから話がわからなくなる。君のいふ通り、僕などは中途からの政黨員だ、だから君などこそ、僕等を引づつて、政黨政治の爲めに闘つてくれるべき筈と思ふのだ』

『政黨員が、徒らに大臣や役人になりたがる、この根性が、政黨の末期現象を代表してゐる。第三期



症状です。これにメスを入れなければ元も子も無くしてしまふ。今がメスの入れ時です。潮時は丁度好い。手遅れになれば足腰が立たなくなつてしまふ。休業して入院する時だ。兎も角、明日の代議士會は取り止めるやうに指令をお出しなさい。一時の感情に支配されて、力もない者が力の有り余る者におつかつて行くといふのは此上もない愚擧です。入院する前に絶命してしまふ』

『代議士會は、時局がデリケートだから、といふ理由で取止めさすことにしても可いが、君がこんな考へだと、超然内閣出現拒否に、わが黨の威力が半減されてしまふ。も一度考へ直して見てくれたまへ。實は、昨日君の方の清水に土屋、山崎が来て、君の椅子に就ても懇談したのだ。今更ら離反されては困つてしまふ』

『僕の椅子のこと？ あれはハッキリ言つてをきますが、僕の意志ではない、僕の方の政黨員さへがあゝいふ眞似をする。だから叩き直さなければならんといふのです』

この時、沈黙を破つた鳥山和郎は始めて口を切つた。

『あれは君の意志ぢやないのか。あれを總裁から聞いて、僕は僕で、君に内務の椅子を譲り、ゴルフでもやらうと一人で定めてゐたのだ』

『ハ、ハ、鳥山、それや又有難い話だ。が、僕が君を押しつけて、鈴木内閣の内務大臣になるやうなことは、恐らくお互の生きてゐる中にはあるまい』

皮肉ではない。深い咏嘆が毛利の胸に在つた。鳥山は、毛利は矢張り、デマの如き野心をもつ者でなかつたと思つた。そして新しい親しさが湧いた。

然し乍ら、親兄弟と雖も、山へ登らうといふ者と、海へ行かうといふ者に話しの合ふことはなかつた。片方は山へ行かねば健康が恢復せぬと考へる。片方は海へ入らなければ駄目だと思ふ。海の方は目の前にひろがつてゐる。山の方は途が峻しく複雑である。

『總裁。僕は決して貴下を裏切る者でもなければ、政黨を捨て、軍閥官僚の使用人になるものでもないのですよ。僕を信じて、この際は、平野内閣の副總裁で我慢する決心をつけて下さい。でない、政友會それ自體が世帯を持てなくなる丈です。そののみか、貴下自身が立枯れになります』

毛利のツケ／＼言ふ無遠慮さに、鈴木は心中甚だ面白くない。然し持前の『馬鹿』を爆發さすべく餘りに彼は毛利に押されてゐた。

『僕と平野とは司法畑の舊い友人だ。平野が政權をとつてから頼まれ、ば否とは言へまい。が既に超然内閣絶對反對の旗を出してある……』

『それがいけないんです。それだと萬が一、齊藤が出てきつと援助する様になる。引づられたんぢや駄目です。引づるんでなくちや。總裁！僕は引づつてゐるんですよ……』

鳥山は、鈴木よりも毛利よりも弾力性を有つてゐる。毛利のやうに、金と手間をかけて積極的情



報を蒐めてはゐないが一種のカンで一種の見透しをつける特有な神経をもつてゐた。

『民政黨から、聯立の便が来た。三井文吉がやつて来たんだ今朝。勿論お話しにならぬといつて断はつたが、然し齊藤でも出て、全るつきり搔つ拂はれるよりは、聯立の方がマシぢやないか』

『聯立も絶對反對の聲明がしてある……今更屈する譯にも行くまい』  
これは、深い吐息の間に洩す鈴木と言であつた。

『鳥山！ その考へが災ひするんだよ。夜店のバナ、ぢやあるまいし、一體何度呼び値が下落してゐるんだ。單獨内閣から人材吸收聯立反對から聯立オーライ。この次はたとへ超然齊藤でも足輕草履とりに成り下るのは知れてゐる。一體貴様は認識不足だ』

お前、貴様が出る時は、この兩人の心が底の底まで解け合つてゐる時であつた。が今夜のそれにはその逆傾向があつた。それを見て取つた鈴木はさすがにハラ／＼して爆發を食ひ止めようとした。

『おい／＼君達は兄弟喧嘩を始めて年寄を手古摺らす積りかい。見つともない、止せ／＼。俺は政權を取り逃しても、君等兄弟をにがしたくないぜ。この方が餘程慾が深いだらうアハハハ』

「俺」といふ一人稱にまで、故意に碎けた鈴木は然し、彼の善人、單純、従つて強さうでもろい性格の肚からの本音である、と先づ觀取したのは毛利である。思はずその眞實にうたれた。

『鳥山！ 喧嘩は止さう、親父が泣く』

『止してねるか。お前も思ひつめてゐすぎる。一ねむりして来いよ。僕も眠い。又明日の事にしませう、鈴木さん』

鳥山の動議に對しては、もう誰も異議はなかつた。

苦蟲を潰した様な顔をして毛利が先づ下に降りた。そこに待つてゐる大野に目を注いだ。毛利は肚の中で舌打ちした。

『大野君、君の方の中心はとうの昔に外れてしまつたね。總裁は甘くて人がいゝんだから、泣かさん様にして呉れ』

と言つた儘、その返答に耳をかさうともせず、草履をつゝかけて出て行つた。

(七)

凶變後、十日間の難航を経て出来上つた政權は、齊藤内閣であつた。鈴木も毛利も、鳥山も各々の思惑はガラリと外れたのである。そして、新内閣に閣員を送つた大政黨は、全く餌に吠えるヤセ犬と化した。今まで、憲政の常道を唱へてゐた新聞といふ新聞は、ケロリとそれを忘れ、木鐸を叩いて、元老の頭の好さをたゝへた。日本のファツショはこの日を出發點とした。

新らしい書記官長と事務引つぎを濟ませた後、毛利は田川の大廣間に、清水や土屋、川崎など一黨



十數名といつしよに澤山の藝妓に取繞かれてゐた。

『さあ、みんな飲み。首途の祝ひだ。お互の世界はいよ／＼之からだぞ。いよ／＼俺の天下が近づいて来た。……徹底的に踏みつけられて初めて、眞個の強い力が湧いて来るのだ……』

毛利が、何時に似ず、酔つて饒舌である。おつるは眉をひそめた。先生は疲れ過ぎてゐらつしやると思ひながら、そつとその側へ行つた。

『先生。失禮して少しお休みになつたら如何でございます』

毛利は、キツと目を見ひらいた。

『心配するな、おつる。酔つて愚痴をいふとでも思つてゐるんだらう。馬鹿な。未だそれ程やきは廻つちやゐない』

『でも先生。毎晩の睡眠不足でゐらつしやるんですから』

『心配するな。みんなが、あんな好い氣持に酔つとるぢやないか。おつる。杉との相談な、けふ杉と具體的に話を進めた。もし待つとれ』

おつるは、止なく座を外した。襖の外へ出ると、そつとハンケチを出して、目頭の熱いものを拭つた。(終)

### ◇編輯後記◇

◇この政治小説は五・一五事件以來、今日に至る非常時日本の政治情勢を内容とした示唆に富んだ問題の實説記録である。時局小説として非常に面白いものである。讀者より多大の好評を受けるものと確信する。

◇五月特輯として發刊された『今日の問題』は今後毎月十日に引續き發行致します。パンフレット・チャーナリズムを全面に取入れた時局雑誌として、果せる哉物凄い賣行を示してゐます。此の種の解説、評論、報導雑誌としては多數の雑誌中、異色ある存在を示してゐます。御愛讀下さい。毎月拂は十二錢、半ヶ年拂は七十四錢、一ヶ年拂は一圓四十四錢です。地方の人々は直接購讀が御便利であります。

◇パンフレットは今後とも毎月三冊發行、二年前納は三圓五十錢です。ハガキで御申込になれば新刊を御送りして集金郵便を差上げます。

◇従來の月報『今日の問題』は今後無代進呈。

失はれた政權

(No. 95)

定價十錢

昭和十二年四月二十日 印刷  
昭和十二年四月二十五日 發行

著者 山浦貫一

發行者 伊藤藤隆 文

印刷所 三陽堂 青野印刷所

發行所 今日の問題社

東京市芝區田村町四丁目十八番地

電話 芝(43)三〇〇七番  
振替東京五九七四八番

東京鐵道局公認 鐵道保榮會(鐵道各線ホーム)

鐵道弘濟會・鐵道授産會

森田書房・富田報英堂

東京堂・大阪屋號(滿鮮)

新正堂(京阪神一手扱)・川瀬書店(名古屋)

菊竹金文堂・大坪惇信堂

次取大



◇目書行刊社題問の日今◇

陸軍 ノレト 研究會編	楠公 密寶大楠公の遺訓書	高橋 世一家言	野田 豊著 投資・利殖の必携	永造 松著 太閤の處世術	松男 著 林銑十郎と眞崎甚三郎	管雄 著 陸軍の智腦九人男	金太 著 日本憲法の精神	松男 著 下川島義之と渡邊錠太郎	小治 著 軍部と國體明徴問題	知治 著 林ジヤクソン式強體健康法	松男 著 下川島義之と阿部信行	長谷 著 裏から見た歐洲の外交戰	了十 著 泉外交陣をめぐる軍部と外務省	久房 著 國體宣揚と重臣ブロック	研究會編	
價一 送三〇	價一 送三〇	價一 送三〇	價一 送三〇	價一 送三〇	價一 送三〇	價一 送三〇	價一 送三〇	價一 送三〇	價一 送三〇	價一 送三〇	價一 送三〇	價一 送三〇	價一 送三〇	價一 送三〇	價一 送三〇	
三夫 著 島日支衝突必然論	石山 著 金持に學ぶ	高橋 著 半生の體験	藤原 著 産業日本の進路	武田 著 田どうすれば選擧運又にならな	元次 著 野人生金儲け修業	了十 著 急迫せる日ソ關係	康夫 著 日露再び戦ふか	三郎 著 井現代軍部論	恒太 著 野人生學第一課	二郎 著 蘇ソ支共同抗日戰	天野 著 沖日ソの危機を探る	野村 著 新官僚の陣容を語る	松男 著 下宇垣一成と南次郎	三夫 著 島赤軍の全貌	康夫 著 赤軍の全貌	淺造 著 池田成彬傳
價一 送三〇	價一 送三〇	價一 送三〇	價一 送三〇	價一 送三〇	價一 送三〇	價一 送三〇	價一 送三〇	價一 送三〇	價一 送三〇	價一 送三〇	價一 送三〇	價一 送三〇	價一 送三〇	價一 送三〇	價一 送三〇	價一 送三〇

◇目書行刊社題問の日今◇

壯一 著 多貴族院改革問題	元次 著 野食ひはぐれなき人生	池上 著 實說二・二六事變	小治 著 林新經濟國策の提唱	順一 著 川惑星久原房之助	修造 著 陸軍の巨頭を語る	菅雄 著 山無産黨は何を求むるか	哲山 著 産業は國營にすべきか	小三 著 林軍部の國策全貌	神一 著 田軍部の國策全貌	喜一 著 多英雄に何を學ぶか	壯一 著 一郎英雄に何を學ぶか	布秋 著 歐洲の不安とスペインの動亂	野村 著 寺内壽一と肅軍の動向	重太 著 寺内壽一と肅軍の動向	新木 著 スペインの革命を語る	齋藤 著 支那怖るべし	管雄 著 傑將・眞崎甚三郎	喜一 著 多増税は脅威か福音か	
價一 送三〇	價一 送三〇	價一 送三〇	價一 送三〇	價一 送三〇	價一 送三〇	價一 送三〇	價一 送三〇	價一 送三〇	價一 送三〇	價一 送三〇	價一 送三〇	價一 送三〇	價一 送三〇	價一 送三〇	價一 送三〇	價一 送三〇	價一 送三〇	價一 送三〇	
中野 著 支那をどうする	伊達 著 日本に何が迫るか	山崎 著 排日の支那を視る	伊達 著 軍部と行政機構改革問題	永吉 著 井政黨亡國論	三夫 著 島日獨はなぜ同盟したか	康夫 著 軍部の産業政策	直谷 著 世界に於ける赤露の暗躍	了十 著 支那はどうか	常三 著 支那はどうか	神一 著 田軍部イデオロギーの展開	野村 著 悪性インフレに備へよ	石龍 著 觀相人物評論	子龍 著 杉山元と小磯國昭	管雄 著 原板垣征四郎と石原莞爾	貞次 著 田日本のインフレーション	新木 著 井馬場財政から結城財政へ	管雄 著 原板垣征四郎と石原莞爾	喜一 著 多増税は脅威か福音か	
價一 送三〇	價一 送三〇	價一 送三〇	價一 送三〇	價一 送三〇	價一 送三〇	價一 送三〇	價一 送三〇	價一 送三〇	價一 送三〇	價一 送三〇	價一 送三〇	價一 送三〇	價一 送三〇	價一 送三〇	價一 送三〇	價一 送三〇	價一 送三〇	價一 送三〇	價一 送三〇

御刊書御注文は、すべて前金にて御願ひ致します。御申込は本社直接又は最寄賣店へ。  
御申込は振替又は郵便切手のこと。月報『今日の問題』『新刊通知』『直接購讀規定』御入用の方は御申出下さい。  
◎本社發行の總目錄御入用の方はハガキで御申込下さい。



# 最新刊・發賣中のパンフレット

全國の驛書店、各書店、ホムスタドンにて發賣中

菅原節雄著	政局の轉換と新勢力の擡頭	定價十錢 送料三錢
輪井英武著	仕事に有りつく法	定價十錢 送料三錢
菅原節雄著	杉山元と小磯國昭	定價十錢 送料三錢
菅原節雄著	板垣征四郎と石原莞爾	定價十錢 送料三錢
新井肅人著	馬場財政から結城財政へ	定價十錢 送料三錢
勝田貞次著	日本のインフレーション	定價十錢 送料三錢
野田 豐著	悪性インフレーションに備へよ	定價十錢 送料三錢
神田孝一著	軍部イデオロギーの新展開	定價十錢 送料三錢
齋藤直幹著	軍部の産業政策	定價十錢 送料三錢
石龍子著	觀相人物評論	定價十錢 送料三錢

東京市芝田區 今問題社 振替 東八四七九五番 東京市芝田區 四町八十番

## ◇今日の問題社・特別出版◇

野田經濟研究所長 野田 豐著	軍部と財界	定價八十錢 送料六錢
海軍少佐 齋藤直幹著	戦争經濟讀本	定價八十錢 送料六錢
野村重太郎 他三名共著	軍部と轉換期の政治	定價六十錢 送料六錢
戸坂 潤著	現代日本の思想對立	定價六十錢 送料六錢
齋藤 二郎著	支那をめぐる日ソ英米	定價五十錢 送料四錢
牧野元次郎 他三名共著	人間を作れ・金を作れ	定價六十錢 送料六錢

本誌出版の軍部は、他社のものと比較して内  
全、四書から見て約半額の最低値の特價にて  
は直接本社へ御便宜の方法で御注文下さい。

軍部時下における日本  
問題の動向と財界の諸  
問題を解説したものの

大軍部時代に於ける日  
本經濟は如何に統制さ  
れ何れか。戦争經濟  
とは何か。

軍部に關するもの無て  
一冊にまとめたもの。

日本に於ける思想は如  
何なる動向をたどるか  
フアツシヨカ、共産主  
義か？

最高權威の機關を動員  
した最新の調査による  
情報書

本誌に於て既に發行した  
パンフレットのうち六冊を  
合して一冊としたものを



369  
637

鈴木茂三郎著 **日本財閥の解剖**  
日本の大小財閥の組織を調べ上げた新研究の書 特價五十錢 送料六錢

三島康夫著 **赤軍の新研究**  
赤軍に對する最近の調査研究の書として専門家に必讀の書 特價八十錢 送料九錢

熊崎健翁著 **姓名判斷と改名法**  
どうしたら姓名で運勢が分かるか。どうしたら良名に改名出来るか。 特價三十錢 送料六錢

不動貯金銀行頭取 牧野元次郎著 **私の處世法**  
一代で日本一の大貯蓄銀行を造り上げた牧野氏の興味深い處世法 特價八十錢 送料九錢

野田 豊著 **戦争と財産**  
四六判三百頁 上質紙・上製 特價壹圓 送料十二錢

陸軍 小林順一大郎著 **日本主義政治の原理**  
四六判二百五十頁 上質紙・並製 特價八十錢 送料九錢

菅原節雄著 **軍部の中心人物**  
四六判二百五十頁 上質紙・並製 特價八十錢 送料九錢

近刊豫告



終

